

学長の業績評価結果(中間評価)

日付	令和3年6月18日	対象期間	令和2年4月1日～ 令和3年3月31日
評価対象者	栗林 澄夫		

1. 評価

優・適・不適

2. 評価内容

<p>●評価項目別評価</p> <p>○教員養成を先導するフラッグシップ大学への挑戦 新しい教育を創造する研究開発大学, 教員養成ネットワークの拠点大学, 教員養成全体を支える基幹大学のテーマといった新たな試みを進めるなど積極的に取り組んでおり、大いに評価できる。なお、地域連携プラットフォーム構築に加え、地方創生や連携オンラインプラットフォーム等による地方創生連携があると、新しい取り組みとしてさらに向上すると期待される。</p> <p>○強靱なガバナンスに支えられた大学運営 大学ガバナンス・コードの作成を通じ、構成員にガバナンス強化の必要性を周知し改革を進めるとともに、給与制度改革や教員組織づくりが順調に推進しており、大いに評価できる。</p> <p>○大学院改革(教育学研究科の改組) 新しい時代の教育改革をリードできる人材養成を目指し、これまでの4専攻から高度教育支援開発専攻の1専攻とする改組が実現でき、かつ2017年の学部改組後初めての学生が卒業する2021年に第1期の入学定員確保ができており、大いに評価できる。</p> <p>○附属学校園改革 附属学校園改革5点については、附属学校統括機構の設置、附属学校園担当理事の配置などを通して具体的な改革が進められており、評価できる。</p>
--

○新たな国立大学の役割に応じた規模の設定

教員集団については、2020 年度に全学一体として機能する「系」組織を構築し、また学生集団については、2017 年度に学部改組した 1 期目の卒業生の教員採用率に向上が見られ、一定の成果は出ている。また、私学や国立大学との連携に向けた検討会議を設置するなど連携構築を図っており、評価できる。

●総評

特別の再任時の計画等を着実に実施し、十分な成果が得られたと認められるので、評価を「優」とする。